
第2の人生頑張ります。

αー℃

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

第2の人生頑張ります。

【Nコード】

N3696T

【作者名】

α℃

【あらすじ】

転生物の二次創作です。フリーワード検索で「あれ、この原作の小説無くな？」って思い、まあ書きちゃいました。まあ実際、誰も書かないのってこの原作があんまり有名じゃないからなんじゃね？とかちよつと今更なんじゃとか思わなくてもいいですが。おもしろいかどうかは分かりませんが、まあ読んでやってもいいかって人がいたら読んでくれるとありがたいです。

主人公は、転生者のオリ主レイノール君です。とある神様にうっかり殺されてしまい、転生することとなりました。オリキャラ出し

ます。原作ブレイク：は分かりません。幼少期から原作前までは、全部飛ばします。もしかしたら、番外編とかで書くかもしれません
が、基本的には書かないと思います。それでは、どうぞよろしくお
願いします。

人生何があるかわからない。(前書き)

こんにちは。一応プロローグ部分にあたります。でも、無駄に長いです。それに、文章が下手なので「うわ、分かりにくっ!」ってところもあったりするかもしれませんが、よろしくお願いします。

人生何があるかわからない。

「ほんつつつとにすいませんでしたあ!!!!」

「……は？」

俺の目の前で1人の女性が土下座で謝罪してきてる。いや、何だよこの状況は。まあ、普通はいきなりこれだと誰でもそんなふうに疑問に思うよな。まあ、このことについて説明するには、少しばかり時間を戻さなくちゃいかなー

「ううゝあちゝ。何だってこんな日にわざわざ呼び出すんだよ……」

現在、俺は真夏の炎天下のクソ暑い中を歩いている。というのも、幼馴染から今すぐ自分の家に来てほしいと頼まれたからだ。何でも、学校の課題に関してどゝゝしても俺の力が必要なんだとよ。本当は行きたくはなかったのだが、俺の数少ない友人の1人でもあるそいつが俺を頼ってきているんだから、そう無下に断ることもできなかったんだよ。

「にしても、いちいちこんな真昼間に呼び出さんでもいいだろうに」

そう。今は日中で気温が最も高くなるとされている午後2時前なんだよ。そりゃ文句の1言や2言出てくるってもんだよ。午前中は、クーラーのガンガン利いた涼しい部屋でゲームやってて、“よっしゃ、今日は1日ゲーム三昧だ!!”って意気込んだのに。

「はあ…まあ何にしてもさっさと終わらせてさっさと帰るか」

気持ちを切り替えて、また歩を進める。と、いきなり頭上が暗くなった。何だ？それに周りの人が、何だかすごい顔して俺の頭上を指差してる。

「何だ？俺の頭の上に何かあん…の……か」

見上げた時には、既に遅かった。その視線の僅か5m程先には、バカでかい看板みたいなものももう迫ってきていた。

「ああ、こりゃ無理だ」

そう思った直後、その物体は俺に直撃した。体に凄まじい衝撃が襲いかかり、俺はその物体に俯せで押しつぶされたような状態になった。周りからは、幾人もの叫び声や慌てた様子の声が聞こえてくる。俺の真下には水溜まりが…いや、血だ。これは俺の血だ。だんだんと広がっていく血溜まりの中、俺は少しでも体を動かそうとするが、腕はおろか指先にすら力が入らない。それに、だんだんと周りの音も聞こえなくなっていく。目が霞む、瞼が重い。“もう助からない”自分でもそれが理解できた。理解できたと同時に、俺を激しい後悔の念が襲った。女手1つで俺をここまで育ててくれた。それなのに、何も親孝行できなかった人。

「…か…あ…さん……ご…め……ん」

俺の喉が絞り出すようにして発した声は、もはや俺の耳には聞こえなかった。そして瞼が落ち、俺の意識は闇に沈んでいった…

「……て……さい…」

何か、聞こえてくる。誰だ？

「…きて…ださい…」

うるさいな。俺はもう少し、眠っていたいんだよ。

「起きてください！」

「うわっ…れ？」

突然の大声に、微睡んでいた俺の意識が一気に覚醒して、ガバツと体を起こす。てか、ここどこだ？

「もう、やっと起きてくれましたね」

隣には見たこともない女の人。何故か溜息吐いてる。美人だなー。

「まったく。いつまでも反応がないから、ちょっと大声出しちゃったじゃないですか」

しかし、覚えのない場所に見たことない美人さん……なるほど、そういうことか。

「あなたに話があってここに呼んだのに……って、ちゃんと聞いてるんですか？」

「これは夢だ。ということは、もう1度寝れば目覚めるはず」

俺はもう1度横になり、眠りにつこうとする。が。

「起きろー！！！」

…叩き起こされた。

「叫ぶな、うるさい」

「あなたのせいでしょう！？」

まったく、うるさい美人さんだな。

「俺に何か用？夢の中の美人さん」

「あなたに話があるって言ったじゃないですか！それに、これ夢じゃないですし！というか、美人だなんてそんな／＼／＼／」

「そうか、なるべく手短に……ちょっと待て。今、あんた何て言った？」

聞き間違い…だよな？

「美人だなんてそんな？」

「違う。もう1つ前だ」

「んー……あなたに話がある？」

「どうしてそうなる！？もう1文あっただろうが！！」

「お、怒らないでくださいよ。ちよつとしたジョークじゃないですか」

「くだらんジョークは好かん。……いいからさっさとええ」

少しドスの利いた声で言ってみる。

「は、はいい！！ “これは夢じゃない” です！！」

「それだよ。嘘だよな？」

「嘘じゃありませんよ。あなたの魂を私がここに連れて来たんです」

「なん……だと……」

そんな馬鹿な。魂を連れて来た？

「本当に何も覚えてないんですか？ あなたはもう、死んでるんですよ？」

「……ッぐう！」

クソ、頭が痛む。それに、脳裏に鮮明に浮かび上がるこの光景は……

「……どうやら、あんたの言ってることは本当みたいだな」

「思い出しましたか？」

「……ああ」

そうだ。俺はあの時看板みたいなものに押しつぶされて、それで。

「そうか。俺、死んじゃったんだな」

ホント、随分呆気なかったもんだな。

「あの〜」

「ん？　そういえば、俺に話があるんだったな。てか、あんた誰？　何で死んだ俺に話があるんだ？」

「あ、そういえば自己紹介まだでしたね。改めまして、私はアテナといします」

「……すまん、ちょっとボーっとしてた。もう1度頼む」

ふむ、恐らく聞き間違いか幻聴か何かだろう。

「ですから、私はアテナといします」

「……ああ、なるほど。アテナさんね。ギリシャの女神と同じ名前とは、両親も思い切った名前を」

「おや、よくご存知ですね。私はそのアテナです！」

得意気に胸を張る自称女神のアテナさん。……けっこうでかいな。88くらいかな？

「……よし、ちょっと病院に行って医者に診てもらおうか。大丈夫、

何も心配はいらない。多少はカウンセリングも必要になるかもしれないけど」

「え！？何でそんな精神異常者みたいな扱い受けてるんですか！？私は至って正常です！！」

いや、だってなあ。

「自分は神様です」だなんて、正常な人は言わないだろ。悪いことと言わない、酷くなる前にきちんと診てもらっとけ」

「私人間じゃないですし。さっき言ったじゃないですかアテナだつて。麗しき女神様ですよ、め・が・み・さ・ま！」

「自分で麗しきとか言うな。だが、まあ、否定はしない」

「それはそれで、何だか恥ずかしいです／／／／」

「はあ…」

何なんだ、この自称女神は。

「それで、俺に話つてのは？自称女神のアテナさん」

「だから自称じゃないです！！」

「ハイハイソーデスカ」

「うううう。まあ、今は私の話題はおいておくとして。まずは、あなたにやらなくちゃいけないことがあるんです」

さっきまでの緩んだ表情とは打って変わって、急に真剣な表情になった。

「…ゴクリ」

思わず生唾を飲む。空気が張り詰める。と、そこでアテナが口を開いた。

「ほんつつつとにすいませんでしたあ!!」

「……は？」

——まあ、こんなことがあったわけだ。いきなり土下座しながら謝罪してきて、突然のことに、俺はポカーンとしてしまう。

「あの、とりあえず頭上げてくれないか？いきなり謝罪されても、俺には何が何だかさっぱりなんだが」

「そうですよね、いきなり謝罪されてもそうなりますよね。うう…」

「あー、その、何だ。キレたりしないから言ってみ？」

「絶対ですか？」

「……多分」

「絶対ですか!？」

「分かった、分かったから。さっさと説明しろ」

「えっと、実はですね、その――」

話し始めてみれば、何とも要領を得ない説明をされたんだが：

「…つまり？」

「ぶっちゃけ、同姓同名だったあなたを間違えて殺しちゃったの。
てへっ♪」

メツチャ良い笑顔ですんごいことを言われてしまった。

「…そうか、そうだったのか」

「分かってくれましたか！」

「ああ。お前が俺に喧嘩を売ってたってことがな。オーケー、その
喧嘩買ってやろうじゃんか！！」

「全然分かってない！？」

「ふっざけんじゃねーぞ！！！！」

俺は大声で怒鳴りつけた。

「お、怒らないって言ったじゃないですか」

「アホ、内容が酷過ぎるわ！！」

流石の俺でも、その内容の酷さには驚き呆れた。

「てか、いくら同姓同名だからって言ったって、お前は仮にも神様（自称）なんだから普通間違わねーだろ!!!」

「だから、（自称）は余計です!!! いや、ちょっと寝不足だったもので。つい、うっかりと」

「俺ってお前のうっかりで死んだんだ!?!」

このカミングアウトには、これ以外にもう何と言えいいのか思い浮かばなかった。

「それで、まあ何と言いますか。私自身も少なからず何割かの過失があるわけですし、あなたに対して罪悪感と責任を感じてしまってるわけなんですよ」

「何割かどころか10割お前のせいだけだな!!!」

「ただ本人に会って、“すいませんでした”ではい終わり、とは流石にいきません」

「無視すんな!!!」

「そこで私は考えました。何か、何かないものかと」

「……」

「そしてついに、すばらしいことを思いついたんです!」

「そりゃよかったですね。それじゃ、俺はこれで」

踵を返し、この場を離れようとするが…

「最後まで聞いてくださいよ」

俺の腰にしがみついてきやがった。

「ええい、離れろ！鬱陶しい」

「お願いですから」

そう言つて、よりいっそうしがみつく腕に力を込めてくる。そう
なると、胸も一緒に押し付けられるわけで。

「や、やめろ！！分かった、分かったから！！ちゃんと最後まで聞
くって！！！！」

生前、女の子との付き合いなど皆無だった俺には、ちょっと刺激
が強いわけで。

「ほんとーですか？」

更にダメ押し、潤んだ目での上目使い。

「ぐはっ／＼／＼／」

会心のいちげき、クリティカルヒット、急所に当たった。特大の
ダメージ、俺は倒れた。ダメージが大きすぎて立ち上がれない。

「それは、反則、だろ。ガクリ」

「え、ええ〜!？」

——数分後、俺は何とか回復した。悪かったな!あれくらいにも耐えられないヘタレで!!

「まあ、気を取り直して。続きをどうぞ」

「ですが、もう大丈夫なんですか？」

「大丈夫大丈夫。そんなにお前が心配するほどのことじゃないから」

「それでは……実はですね、あなたには特別な転生の機会を与えることにしたんです!」

「特別な転生？」

何だそりゃ？

「説明いたしますと、通常は転生して次の生を得る際には前世の記憶・知識・人格などといった、その人物を形成するあらゆるものをリセットしなければいけません。そうしないと私が怒られてしまいますからね!」

「お前の事情は今は置いて。それで？」

「そして今回、あなたは自身の記憶・知識・人格などをそのまま引き継ぐ形で転生していただきます。それに加え、何らかの能力をい

くつか付加させることもできます」

「つまり？」

「チートな転生者になっていただくわけですね！」

「それ、マジですか!？」

「マジです!!」

これはすごい展開になった。まさか自分がそんなもん（チート転生者）になることになろうとは！

「それではこれを」

そう言って、何やら穴の開いた箱を出してくる。

「これ何？」

「何って、見て分かりませんか？くじ引きですよ。これで転生先を決めるんです」

「俺が決められるわけじゃないの!？」

「それじゃくつまんじゃないですか」

そういう問題ではないと思うが、とりあえず手をつ込んで1枚紙を引き、それをアテナへと渡す。

「なにに、＞PRISM ARKの世界ですか」

ふむ。まあ、おもしろそうではあるな。

「それでは、転生先は決まったところで。何の能力を付加しますか？もちろん、別に何も付加しないという選択肢もありますが」

「ちなみに、付加できるのはいくつまで？」

「そうですね、多すぎなければ特に上限はないですかね」

こういうのにありがちな、上限がないだと？それはそれで不安になるな。多すぎると能力が中途半端になりそうで。

「そうだな、じゃあ1つ目は“鍛えれば鍛えた分だけ強化される。強くなった分の能力は弱体化しない”ってのでどうだ？」

「いきなり人外なチートスキルですね！！」

「うるせーよ、何でも構わないんだろ？」

「それはもちろんです。ではお次は？」

「そうだな……」

こう、改めて考えるとけっこう悩むもんだな！

「それじゃ、“魔法は練習すれば異常なレベルで使えるようになる”とか」

「これれもまたチートですね。ちなみに、異常なレベルとは？」

うーん、そうだな。

「本気出せば辺り一帯見渡す限りを一瞬で焦土と化せるくらい？」

「もはや天災レベルですね」

「いいんだよ別に。そんなことやらないから。あ、回復魔法は別に使えなくてもいい、魔法はこの世界以外のものも使えるって条件も含めてくれ」

「まあ、その辺はあなたにお任せします。それで、他には？」

「じゃあ、“どんなに食べても成長はしても決して太らない”とか」

「これはまた、前の2つと比べるとかなり普通ですね」

「だって、どんだけ食べても太らないとか最高じゃね？」

「それには激しく同感です！女の子には是非とも欲しいものですね
！！」

「そうだろうー。甘いもの食べ過ぎて体重計に乗るのが怖い、なんてこともないからな。便利だぜ！！」

「ですねー。私もそんな体質だったら……」

憧れるんだろうな。

「でもさ、お前神だって言うんならさ、前2つはまあデフォルトで

出来そうだけど、自分自身をそういう風に変えることも出来るものなんじゃないのか？」

「まあ出来なくはありませんが、無暗にそういう使い方をすると、これもまた怒られちゃうんですよね。まあ怒られなかったとしても、元からする気はありませんけどね」

「何故だ？お前自身も望んでいるんだろう？」

「“力を行使するということは、その責任を負うということと同義である”です」

「…どういう意味だ？」

「つまりですね、例えば自分が行使した力によって何らかの影響が出たとします。これは出ないことはほぼないと思ってもらって構いません。そして、それに対して自分は直接的には関与していないからといって“自分には関係ない、別に自分のせいじゃない”というわけにはいかないということです」

「ふむ」

「要するに何が言いたいかというと、私が先ほどのものを力を行使して叶えた場合、どういった影響が出るかなんて私にだって分かりません。小さなものかもしれないし、大きなものかもしれない。そして、それらすべてをフォローすることは、いくら私が神といえどもおそらく力不足で現状私には不可能でしょう」

「ほう」

「責任を負うことが出来ていないのに力の行使は出来ない、これが答えです」

こいつ、けっこうよく考えてるんだな。まあ、あの“私今良いこと言った!”と言わんばかりのあのどや顔はムカつくがな。

「そんな言葉の意味を知ってるのだけど、いつもそんなこと考えてるってのは、正直感心するし素直に凄いなと思うな」

「そうでしょうそうでしょう! 何てったって私知恵の神でもありませんからね!! あっはっはっは!!!!」

うわー、褒めた途端にこれかよ。

「まあ、さも私最初から知ってましたって感じで言いましたけど、これある人物に教えてもらったことであって私の受け売りってわけじゃないんですよー」

「やっぱさっきの言葉ナシ!」

俺はこいつに向かって、腕で大きく×印を作って見せた。

「何ですかー!!」

「黙れ! だってお前が凄いわけじゃないじゃん! それ言った人が凄いいんじゃない! なんに何でお前褒めなきゃいけないんだよ!! おかしくね!?!」

「私ちゃんと実践できてるんですよ? 褒めてくれたっていいと思うわけなんです」

「まあ、それに関しては確かに褒めてやってもいいかもな。でも、それを褒めてくれて自分で言うのって、何か間違ってるねーか？」

「私は褒められて伸びる子なんです。細かいこと気にしちゃダメですよ。将来ハゲちゃいますよ？」

「喧しい！！大きなお世話だ！！！」

「まあ、その話はこれくらいにしておいて」

「そうだな。てかさ、じゃあどうして今回は俺にそんなことが出来るんだ？さっきのだと辻褄が合わないぞ？」

「上司の指示ですから！！！」

「…さいですか」

よし、もう突っ込まないからな。

「えーと、それでは他にはありますか？」

「うーん、……じゃあ“生活に困らない潤沢な資金が欲しい”かな」

「さっきのよりも更に普通ですね。かなり庶民っぽいです」

「確かに、自分でもそう思う。だが、これはこれでけっこう重要なことだと思うぞ」

「そうですねー、そもそもお金がなくてはいろいろと困りますしね」

そういうことだ。

「まあ、そんなもんかな」

うん、やりすぎはいけないからな。

「では、以上の4つを付加するということでいいですか？」

「あ、待った。今もう1つ思い付いた」

「何ですか？」

“伝○伝の武器とか忘却欠片などを生成・使用する能力”！

「原作の世界観ぶっ壊しましたね！」

「いやー、あれ1度使ってみたかったからさー」

「でも、グロウヴィルとかの代償はどうするんですか？ あんなのそうホイホイぶっ放してたらすぐ死にますよ？」

「そこは、ほら、俺の目の前にいる麗しき女神様のお力でどうにかしてもらおう」

「調子のいい人……」

「まあ、頼んだ」

「それでは、半径1kmの周囲の気を吸収することで代用できるよ

うにしましょう。あ、もちろん、あなた自身の気も大幅に消費しますからね」

「流石アテナ、頼りになるな」

「いや、それほどでも／＼／＼／」

褒められて伸びる子、一応褒めてみた。すっげー機嫌よくなったよ、こいつ。単純だなあ。

「では、以上の5つでよろしいですね♪」

「あ、待ってくれ。実は最後にあと1つ、そういうのとは全く関係ない、むしろお願いとでも言った方がいいか？ ってことがあるんだが」

「では、それもどうぞ」

「あのさ、転生した後もあんたに会ったりとかはできないか？」

「え？」

「だから、転生した後もあんたに会ったりとかはできないかって聞いたの。何度も言わせんな！ 恥ずかしいだろうが／＼／＼／」

「……」

黙り込んじまった。

「おい、どうなんだ？」

「……私に惚れましたか？」

なっ！やっ！と口を開いたと思ったらこいつ！

「ばっ、違えよ！！ただ、せっかくこんな風に会ったのに、これではいさようなら”でもう会えないなんて、何と言うかその／＼／

「おやおや、これは何とも嬉しいことを」

クソ！ニヤニヤしながらこっち見んな！！

「俺さ、本音でこんなに誰かと話したの、あいつ以外では初めてなんだよ！！もっと話したいって思っちゃったんだよ悪いか！！！！」

「照れちゃって可愛いですね〜♪」

「うるせーよ！で！？どうなんだよ！！」

「そうですね〜、分かりました。ちょっと待っててください」

そう言っ、懐から携帯？のようなものを取り出して、何やら誰かと交渉し始めた。神様でも携帯持つてるんだな…

「——はい。はい。本当ですか！？ありがとうございます！！はい失礼します！！」

どうやら電話が終わったようだ。

「お待たせしました。今、上司にことの顛末を報告して掛け合ったところ“それならお前もその世界に行ってこい”と言われました」

「と、いうことは？」

「はい。転生した後も、会おうと思えばいつでも会えます！」

凄く思い切った上司だな、その人？神様？は。

「そうか」

「もっと喜んでくれてもいいんですよ？」

だから、ニヤニヤしながら言うな！！

「ぐっ」

「ほらほら、遠慮せずに」

「はいはい！とっても嬉しゅうございます！！これで良いか！？」

「ふふっ、はい！！」

クソ、嬉しそうに笑いやがって。メチャクチャ恥ずかしいじゃね
ーか／／／／

「あ、そういえば1つ忘れていたことが」

「……何だよ」

「そう勘ねないください。それで忘れていたことなんですが、転生後の容姿はどうしますか？お好みでどんな感じにでもできますが」

「別に勘ねてない。めんどくさいからお前に任せる」

そんなもん、もうどうでもいいよ。

「それでは、今から転生してもらおうことになります。準備はよろしいですか？」

「ああ」

いよいよか、楽しみだな。

「それでは、転生後にまたどこかで会いましょう」

「おう」

返事をすると同時に、俺の意識はフツと闇に落ちた。

人生何があるかわからない。（後書き）

読んでくださった方々、ありがとうございます。次の次の話から、本編に入ろうかなと思っています。誤字・脱字があったら指摘してくださいと助かります。

***人物設定* (前書き)**

人物設定です。現在のオリ主の家族の設定を書きました。オリ主だけ2つあるけど、あんまり意味はないので気にしないでください。

人物設定

名前…レイノール・エルド

性別…男

一人称…俺

>原作開始4年前時<

愛称…レイ、レイさん

身長…165.5cm

体重…67kg

好きなもの…のんびりした時間、他愛無い会話、鍛錬、ハヤウエイ
一家、アテナ

嫌い(苦手)なもの…命を軽んじる行為、相手を貶める行為、涙、
退屈

とある神様の手違いにより、不慮の事故に遭い命を落としてしま
う。しかし、今までの記憶・知識・人格をそのまま引き継ぐ形で、
PRISM ARKの世界に転生することになったこの小説の主人
公。原作知識は持ち合わせている。

容姿は、10人中7、8人はかっこいいと思うような感じで、髪
は藍色で肩には届かないくらいの長さ。痩せ形で見た目は少し華奢
に見えるが、案外がっちりとはしている。実は、見た目の容姿は髪
以外は生前とあまり変わっていない。

両親は、3歳の時に父を戦争で、その1年後に母を病気でそれぞ
れ亡くしている。そのため、1人暮らしをしているが、ハヤウエイ
の家に度々厄介になっているため、あまり1人暮らしとは言えない。

基本的には、楽天的な性格をしており、大抵のことは「どうにか
なる」で済ませてしまうが、適当主義ではない。また、生前は人付
き合いが苦手だったせいで、何度も後悔するような事態を経験して

いることから、人との繋がりや付き合いを何よりも大切にしようと思いがける。そのため、人の心情の機微に聡く、けっこう気が利く。その上、誰かに対して怒ったりすることは滅多にない。だが、鈍感。それが美点であると同時に、欠点でもある。1度死んで転生したことからにより、いろんな人との交流が増えたことから性格がけっこう変化している。また、けっこう賢くて少しばかり人とは着眼点が違うことがある、たまに周囲が反応に困るようなことを言うことがある。

原作の主人公であるハヤウエイと同じ村に住んでおり、彼とはとても仲が良く鍛錬以外の時にはよく行動を共にする。なお、彼の妹のフィーリアとも仲が良く、普段は彼女のことを名前で呼ぶが、『姫さん』と呼ぶこともある。

原作開始の3年前に起きるとある事件で、原作では救われなかったある人物を助けたいと考えている。そのために強くありたいと願い、幼少より自分を鍛える。少し大きくなってからは、ハヤウエイの祖父にも鍛えてもらっている。武器は、短めの剣と長めの剣の2本を使う。ただし、二刀流というわけではなく、その場その場の状況に応じて2本を使い分けるといった感じである。短めの剣は無銘の剣で、家に伝わるものらしいがよくわからない。ただ、刀身が細い割にはかなりの硬度を誇るので、まず折れることはない。長めの剣は伝○伝のグロウヴィル。通常、使用者の体の1部を代償に力を揮うが、これは半径1kmの周辺の気を吸収することによって代用することができる。しかし、使用者の気も大幅に消費するうえ、威力も本来よりもけっこう落ちてしまう。

神様からは、“鍛えればその分だけ強くなる”“魔法は練習すれば回復魔法以外は異常なレベルになる”など、少し微妙なものもあるがチートな能力をいくつか授けてもらっている。しかし、あくまでも鍛えればどうにかなるというような能力をもらっているだけで、最初からそういうことが出来るというものではないので、何もしなければその辺にいるモブと同程度である。

ちなみに、生前は享年21歳の平々凡々な大学生（彼女無しの童

貞)だったが、そうモテなかったわけではなく、ただ単に自分への好意に気が付かなかっただけだったりする。まあ人付き合いに臆病だったが故でもあるのだが。

アテナとは、転生後の両親が死去した後に再開した。彼女からの扱いは、過保護な姉の弟に対するそれのようなものであったが、何にせよまた繋がりを持てたことに歓喜しつつも、ちょっとだけ素直になれない時もある。

＞原作開始時＜

愛称…レイ、レイさん、お兄ちゃん、レイ君

身長…178・8cm

体重…78kg

好きなもの…上記のもの、義妹

嫌い(苦手)なもの…上記のもの、ハヤウエイの祖母

4年前より10cm以上身長が伸び、体型もよりがっしりとしたものになった。髪も長く伸び、肩には届かないくらいだったのが腰辺りまでになった。

当初の計画通り、3年前にある人物を助けるために行動、実際かなりヤバくて何度か死にかけるが何とか成功。以後、ハヤウエイ一家にもいろいろと手伝ってもらいながらも、自身の義妹として一緒に生活してきた(本人も了承済み)。彼女のことを物凄く可愛がっており、親バカならぬ義妹バカな兄と化してしまい、「娘は嫁にはやらん」と言う父親みたいに「妹は嫁にはやらん」とかい出し始末である。最近、フィーリアよりも魅力的になってきた妹をハヤウエイに自慢してからかうのが楽しい。

性格は更に明るく奔放になり、以前に比べたら立派になった(と自分では思っている)。そして、ちょっとアホにもなった。また、

今ではアテナを本当の姉のようなものと認識するようになり、少しだけシスコン気味にもなり依存度も少しアップした。

鍛錬の甲斐あり、かなりの実力を付けるに至ったが、何故かハヤウェイの祖母には1度も勝てたことがない。魔法は、誰もいないところに行っては、1人で黙々と練習を重ね、一応は実戦にも使えそうにはなった。オリジナルの魔法も作ったが、威力のコントロールがイマイチ不安定なところがあり、成功すればきちんと自分のイメージ通りの威力で発動できるが、失敗したときには威力が極端に高かったり、また逆に極端に低かったり、そもそも発動しなかったりと、あまり信頼できるような出来ではない。今のところは、成功と失敗が7…3くらいの割合なので、成功が10割になるように、目下特訓中。でも、フライだけは猛特訓の結果、応用しながら使えるまでになった。

ちなみに、何故ハヤウェイの祖母が苦手なのかというと、以前彼女に会ったときに「ああ、ハヤウェイのお婆ちゃんか」とうっかり洩らしてしまい、（何故か）ハヤウェイ共々こっ酷くお仕置きされたからである。

今年から、ハヤウェイと一緒にローゼンベルグ騎士養成学校に通うこととなる。本物の原作ヒロインズや愛すべき3バカに会えるのが、今から楽しみで仕方がない。

名前…シャル・キエル

性別…女

一人称…私

愛称…シャリー

身長…フィーリアより10cm程度高い

体重…?? kg

好きなもの…平穏な日々、フェルちゃん、お兄ちゃん、お姉ちゃん、ハヤウエイ一家

嫌い（苦手）なもの…実験体としての日々、ヴィエーラの騎士、雨
3年前にレイノールから助けられたある人物とは彼女のことであり、後に彼の義妹となる。それから、彼に非常に（過剰に？）可愛がられ続けたため、たったの3年間でフィーリアばりのお兄ちゃんLOVEになってしまう。

可愛らしい容姿をしており、綺麗に伸ばされた輝く銀色の髪が特徴的。3年前と比べて身長も伸び、身体つきもより女性らしくなり、なかなかの大きさの双丘（B83）を携える。この魅惑の肢体で、兄に対していろいろと試行錯誤してはいるが、結果はあまり芳しくないらしい。

もとは、雪の国グリュンラントの出身で、ヴィエーラの研究施設に健康診断の名目で収容されていた。しかし、実状は人間の天使化の実験が行われており、その実験体として日々を過ごしていた。彼女の背中にある羽はその名残である。フェルとはそこで知り合い、大切な親友として心を通わせていった。そして3年前、他の被験者とともに施設を脱走、一緒に逃げていたフェルが動けなくなったため、自分を囚にして彼女を逃がす。必死に逃げるが、精根尽き果て諦めかけたところをレイノールに発見され、助けられた。そのことから雨の日が嫌いで、そういった日には1人になるのが怖いことから絶対に家族から離れず、家族以外の他の人とは会話さえもほとんどしなくなる。

フィーリアとは、同じ年代の女の子・兄同士仲が良い・2人ともお兄ちゃんLOVE（？）など、共通するところが多いことから非常に仲が良い。今も2人で何やら企んでいるようだが……？ただ、最近になってフィーリアが自身の体（特に胸）を見た後、こちらを羨ましそうに見ては溜め息をついているのがちょっと心配（自分の

せいだと気付いていない)。

また、アテナにも非常に懐いており、兄とほぼ同じくらいに大切に思っている。【レイノール>||アテナ>>フィーリア>>>>ハヤウエイ】みたいな感じ。と同時に、彼女のスタイルに憧れを持っており、日々努力の真っ最中である。それでも、兄が彼女と仲睦まじく話しているとちょっぴり嫉妬してしまうこともある。

名前…アテナ

性別…女？

一人称…私

愛称…アテナ、お姉ちゃん、アテナさん

身長…171cm

体重…??kg

好きなもの…レイノール、シャリー、ハヤウエイ一家、料理、家事全般

嫌い(苦手)なもの…神の仕事上の上司、争いごと

主人公をうっかり殺してしまい、その後転生させた張本人。寝不足だったために、同姓同名だっただけでまったく無関係だった彼を間違って殺してしまったらしい。

性格は、明るく純粋であり正直者。そして、とても優しいためいろんな人に懐かれやすい。自分のことよりも、まずは人のことを第1に考える。本人曰く、“褒められて伸びる子”らしい。

顔は凄まじく美人で、朗らかな笑顔が特徴的。メリハリのあるスタイルをしており、主人公はB88cmくらいじゃないかと言っていたが正確には90cmあり、かなりの巨乳お姉さんである。実際、

大きくてけっこう肩が凝るらしい。クネクネと体を振じらせると非常に扇情的で、ぶっちゃけるとかなりエロい。それを目撃してしまう主人公やハヤウエイは内心ご馳走さまですと思いながらも、ガン見すると妹たちに怒られるため、実際には目のやり場に困ってなかなか大変。

正体は、ギリシャ神話にも登場する女神アテナらしい。でも、見た感じそんな凄い神だとは思えないほどに威厳の欠片もない。ただ、女神アテナと言うだけのことはあり、闘うとメチャメチャ強い。チートな力を得た主人公でさえも、本気の彼女には文字通り手も足も出ないくらいの桁外れの戦闘能力を誇る。しかし、彼女自身はあまり闘いを好まないため、本気を出すことはまあない。今までで1度だけ、自分の取って置きのデザートを主人公に勝手に食べられたときに本気で彼をボコボコにした。彼はその時、彼女のデザートだけは決して勝手に食べないようにしようと心に固く誓った。そして、年齢は不明だが神であるため肉体の衰えがないことから、主人公と初めて出会った時からまったく老けていない。

家事全般は、基本的には大体何でもできる。料理をするのが大好きで、何かといろいろ作ろうとするが、その腕前は壊滅的に下手。なので、2人からはいつもご飯を作らせてもらえない。たまに勝手に作っては、妹には絶対に食べさせられないと主人公が1人で食べてしまい、悉く生死の境を彷徨っているが、それにはまったく気が付いていなかった。実際、主人公は全てを平らげた後、美味かったと言ってすぐに部屋に引っこんでいたため、気が付かないのもしょうがなかったと言える。最近になって、自分の料理が壊滅的に不味いことにやっと気が付き、それでも毎回美味いと言って食べてくれていた主人公にかなり好感度を高めており、もっと上手くなって今度こそは本当の意味で美味いと喜んでもらえる料理を作ろうと、フイーリアやシャリーに手伝ってもらいながら目下特訓中。

この世界でできた家族が何よりも大事で、2人の弟・妹にはかなり過保護。時には2人のどちらかにべったりくっついてはなれない

日があつたりと、2人への依存性がもの凄く高い。今は、ローゼンベルグ騎士養成学校に行く主人公のことがとても心配。どうにか出来ないものかといういろいろお悩み中。

騎士養成学校へGO! (前書き)

第1話です。気軽に読んじてください。

騎士養成学校へGO!

こんにちは、レイノール・エルドです。ついに、ローゼンベルグ騎士養成学校へと行く日がやってきた。と言うか、始まってすぐ“ついに”ってのも可笑しな話だな。でも、まあその辺は気にしない方向で。

「お兄ちゃん、朝だよ……って、もう起きてたんだ」

「ん？ ああ、今日はそう長くも寝てられないからな」

今、俺を起こしに来てくれたこの娘はシャル・キエル。可愛い俺の妹だ。毎朝、同じくらいの時間に起こしに来てくれる。

「おはよう、シャリー。今日もいい風」

「うん、おはよう、お兄ちゃん！ 今日もいい風車日和だね」

ああ、今日も朝から眩しいくらいの笑顔。俺、この娘の兄で本当に良かったーって毎日実感するわ。ちなみにシャリーとは妹の愛称のことで、親しい人はみんなだいたいそう呼んでる。

「朝ごはんできてるから、支度してなるべく早く来てね。じゃなきゃ冷めちゃうから」

「わかった、すぐに行くから先に行っててくれ」

「はーい」

さて、さっさと着替えて行くかな。

「あ、レイ君おはようございます。今日はやけに早かったですね」

「おはよう。まあ、今日はローゼンベルグに出発する日だからな。そうゆったりもしてられないだろうから、ちよっと早めに起きた」

今挨拶したのは、俺の姉のアテナ。この家には、姉のアテナ・俺・妹のシャリーの3人で暮らしている。両親は2人とも他界して逝っちゃってるから、実質アテナが親の代わりみたいな役割になっている。家事全般は大丈夫なんだが、正直頼りない。

「今日行っちゃうんですよね。お姉ちゃん、レイ君がとっても心配です」

そう言って、アテナは表情を少し曇らせる

「やめい。食事時にそんな辛気臭い顔すんな。飯が不味くなる……ことは絶対ないが、何か雰囲気重くなる」

「そうですね、この話は今はやめておきましょう」

「そうしてくれ」

「それじゃあ、ご飯食べよ？」

みんなで声を揃えて。

「「神に感謝を」」

そして、飯を食い始める。うん、今日も朝飯美味い。

「今日もシャリーのご飯は美味しいですね」

「えへへ、ありがとう」

「うん、確かに美味いよね。どっかのアテナさんとは大違いだ」

「どっかのアテナさんって…」

「何ですかそれ！失礼ですよ、もう」

おれの1言にシャリーは苦笑いで、アテナはさも遺憾だと言わんばかりの表情だ。

「いや、だって。なあ、シャリー？」

「あ、あはは」

「むう。いつかあまりの美味しさに、レイ君が咽び泣くほどの料理を作って見せますよ！」

「咽び泣くて、そりゃどんな料理なんだよ…」

正直、そんなもん全く想像つかない。それに、こいつがそんな料理を作れるようになるなんて、もっと想像できない。つか、ありえない。

「まあまあ、2人とも。今は朝ごはん食べよ？」

「そうだな」

「はい」

俺たちは食事を再開し、あまり時間を掛けずに食べ終わった。そして、食後のお茶を飲んでいると。

「それで、レイ君はいつごろ家を出るんですか？」

ふむ、正直考えてなかった。まあ、すでに1週間遅れてるわけだし、そんなに急いで出ようとは思っていないが、さて。

「まあ、ハヤウェイ次第じゃね？あいつと一緒に行く予定だしな」

「お姉ちゃんは、レイ君の顔が見られなくなるのは寂しいです」

「私もそうかな。お兄ちゃんと離れるのは、やっぱり寂しいかな」

2人とも表情を曇らせた。ああ、やめてくれ。そんな顔をしないでくれ。

「まあ今生の別れてわけじゃないんだし、そんなに悲しそうな顔をしないであれ」

そう言って、正面に座る2人の頭を優しく撫でる。髪がサラサラしていて、手触りが非常に良い。

「お、お兄ちゃん／／／／」

「レイくくん」

シャリーはほんのり顔を上気させて俯く。ああ、可愛いなあ。本当に癒されるわ。アテナは撫でられるのが好きなのか、目を細めて俺の手に頭を擦り付けてくる。これじゃ、どっちが年上なのかわかりやしねえな。まあ、悪い気はしない。

「んじゃ、ちょっと荷物確認してくるわ」

そう言っ頭から手を離して立ち上がる。

「あっ…うん」

「あくん」

シャリー、そんな寂しそうな顔しないでくれ。俺が何か悪いことしたみたいな気分になる。そしてアテナ、お前は気色悪い声を出すな。

——そして、出発する時間になったわけなんだが…

「…遅い」

はい、ハヤウェイが未だに現れない。ただ、あいつの家からは慌しく声やら音やらが聞こえてくる。

「まったく、何してんだか」

「寝坊でもしたんじゃないかな？それで、今慌てて準備してるとか」

「あり得ますね。と言うか、それ以外あり得ませんね」

こんな日に寝坊とか勘弁してほしいぜ。まあそのおかげで2人は少し長く一緒にいられたわけだから、強ち悪いことばかりというわけでもないな。

「悪い、待たせたな」

「遅すぎだ。まあ大方、昨晚興奮してなかなか寝付けなくて、フィリアに叩き起こされてたんだろ？」

「うっ」

まあ何と言うか、まんま原作通りだった。

「まあいいさ。出発するか」

「ああ。急いで走って行かねーとな」

「1週間前に入学式があってんだ。今更急いだところで体力の無駄だろ」

「でも、これ以上遅れるわけにもいかないぞ？」

「あのな、ここから1週間はかかるんだぞ？お前ずっと走るのか？てか走れるのか？」

「……無理だな。ゆっくり歩いて行くか」

「それが賢明だな」

「お兄ちゃん、忘れ物、かなーっ!」

フィーリアが弁当持って出てきた。そして、ハヤウエイに向かってスロウアウェイ!そのまま、振り向いたハヤウエイの鼻っ柱に向かって吸い込まれるように飛んでいき――

「とはあっ!?!」

クリーンヒット。うわあ、痛そー。

「…大丈夫か?」

「ぜ、全然平気だぞ」

そんな涙目で言っても、説得力皆無だからな。

「お兄ちゃん、ハヤウエイさーん、いってらっしゃーい!?!?!」

「怪我に気を付けてくださいねー!?!?!」

「2人とも頑張って、かなー!?!?!」

「「行ってきましたー!?!?!」」

手を振る3人に見送られながら、俺たちは住み慣れた故郷の村を出立した。

「なあ、本当にこっちであってるのか？」

「うーん、たぶん？」

俺とハヤウエイは、順調に学校へと向かい、その途中、この森の中を通った方が近道だと教えてもらったので、そっちを選んで行くことにしたわけなんだが…

「それらしい建物なんか微塵も見えないぞ？」

「てか、出口すら見えてこないな…」

現在絶賛迷子中。つか本当に到着できるのか不安になってきた。

「多少遠回りでも分かりやすい道を選ぶべきだったな…」

「そりゃそうだが、今更後悔したところでもう遅い。とりあえず、進んでみるしかねーだろ」

「そだな…」

と、少しダウンーになりながら歩いていた時だった。

「誰だ!？」

「な、何だ!？」

どこからか声が聞こえてきた。ハヤウエイは辺りをキョロキョロと見回しているが、人の姿はない。耳を澄ましてみるのが、辺りはしんと静まり返っていて物音ひとつしない。

「…気のせい、ではなさそうだな」

どこからかピリピリとした、何か緊張を孕んだ空気が感じられる。

…ピチョン

「水音？」

ハヤウエイと俺は、今水音がした方へと意識を向ける。さっきよりも剣呑とした空気が感じ取れた。

「……どこの手の者だ……」

俺は咄嗟に声のした方へと駆ける。ハヤウエイも慌てて俺の後に続いてくる。

「く……剣が……!」

草むらを飛び出すと、そこには泉があり、1人の女の娘——プリーシア——が、周りには何人かの忍者が彼女を囲むようにして立っている。そして、その内の1人が彼女へと襲い掛かる。

「っしやオラー!!」

俺は背中に背負っている長剣——グロウヴィル——を抜き、泉の淵を強く蹴ってその忍者へと斬りかかった。

「!!」

突然の部外者の出現に一瞬怯むものの、その忍者は俺の攻撃を防ぐべく防御姿勢に剣を構えた。

「…ぐっ！」

しかし、勢いをつけた俺の一撃に耐え切れずに、その忍者は後方へと吹き飛ぶ。そして、某仮面ライダーのイ○ジン風に決めポーズと決め台詞。

「俺、参上!!」

みんなは、ぽかーんとしてました。あれ？

騎士養成学校へGO！（後書き）

第1話どうでしたでしょうか？キャラがプロローグの時と違うのは、時間の流れでそうなったということ。えー、お読みいただきありがとうございます。

俺、参上!! (前書き)

第2話です。戦闘シーンはないですね。しよーもない会話ばっかです。

俺、参上!!

SIDEプリーシア

「俺、参上!!」

この男はわらわの前に現れるなりそう言った。水浴びをしておったわらわは、今は丸腰で服すら着ていない。つまり、わらわを助けたと見ていいだろう。

「あれー、おかしいなー? 何で無反応なんだ? ちゃんとポーズまでバッチリだったのに」

男は、首を傾げながら1人で何やらぶつぶつと呟いている。敵を前にしているというのに、緊張感が全く感じられない。

「…」

わらわを襲う集団——ニンジャというらしい——が、こちらへ、そしてもう1人泉の淵に立っている男へと視線を向け、こちらへと視線を戻す。

「…邪魔をするな」

1人のニンジャが口を開く、この男への警告だろう。だが、この男は

「お前らバカか? ここで“はい、そーですか”って退けるわけないだろ。ちったあ無い脳味噌使って考えやがれ」

そう言い放った。明らかに挑発と取れる言葉だ。というか、脳味噌が無いのならば考えることは出来ないのでは？

「ならば、まずはお前を排除する」

「くっ」

わらわは未だ丸腰のまま。あまり下手に動くこともできない。

「待て、ここは一旦退く」

しかし、リーダーとみられるニンジャが、そう言葉を発する。

「だったらさっさと帰れ。しっしっ」

そして、この男はまるで犬でも追い払うかの如くそう言い放った。しかし、ニンジャどもは、まるで気にした様子もなく森の中へと姿を消した。

「おーい、ハヤウエイ。いつまでこの娘の裸ガン見してんだよ？」

「はっ!？」

わらわが腕で体を隠してハヤウエイと呼ばれた男を睨みつけると、そやつは慌てて目を逸らした。

「い、いや。別に俺は…」

「まあ、いいか。さっさと行こうぜ」

「あ、ああ。そうだな」

「…待て」

そして、わらわはこの場を離れようとした2人を呼び止めた。

S I D E
O U T

「…待て」

さっさと学校に向かいたかった俺たちだが、この場を離れようとするとプリーシアに呼び止められた。

「何だ？俺たち急いでるんだけど？」

しかし、彼女は何も言わず、険しい表情のままこちらを見てくる。

「先に服着たらどう？正直目のやり場に困ってるんだが…」

「…キッ！！」

「うっ…」

キッとこちらを睨みつけると、いそいそと服を持って草むらへへ入っていった。そして、服を着たプリーシアは、こちらへと近付い

てくる——レイピアを抜いて。

「で、俺たちに何か用か？」

そう問いかけると、依然として険しい表情のままレイピアを突き付けてきた。

「そなたら、こんなところで何をしておった。よもや、覗きをして
おったわけではあるまいな？」

「なっ……」

ハヤウエイ絶句。と言うか目を逸らすな、本当に覗きやってたみたいだろうが。

「覗きなんかやってねえよ。変な言いがかりはやめてくれ」

「真かつ!？」

「本当だって!! どうしてそんなことしなくちゃいけないんだよ!」
「？」

俺に続き、ハヤウエイも自らの無実を訴える。だが、まあそう見られてもおかしくはない状況ではあったな、残念ながら。

「わらわはそなたらの事情は存ぜぬからな。応えようがない」

「まあ、確かにそうだな」

「そ、そんな……」

「さあ、正直に言え!!」

レイピアを持つ手に力が入る。面倒だし、一応弁解しとくか。

「俺たちは、たまたまこの辺を通りかかったただけだ。そこで、切迫した状況のあんたに出くわしたってわけだ」

「そう、そうなんだよ!!濡れ衣なんだよ!!」

「俺の服が濡れてるから濡れ衣ってか!上手いこと言うな」

「このような状況で、よくもそのようなつまらぬジョークが言えるものだな」

「えっ!?俺、別にそんなつもりじゃ…」

まあジョーク云々はさておき、このままじゃプリーシアに何されるか分かんねーぞ。それに、服濡れっぱなしで気持ち悪い。

「ふん、まあよい」

「ほっ」

ハヤウエイ、プリーシアが剣を収めたことに心底安堵したっぽいな。んな後ろめたい気持ちだったのか、お前は?

「じゃあ、ハヤウエイ。あとは任せたぞ」

「は?任せたって何を?」

「俺、先に行くからさ。あとのことは任せたぞって言ったんだよ」

「ええっ！？何でそうなるの！？」

何故そんなに狼狽えてるんだ。

「だって、服濡れてて気持ち悪いから」

「全く説明になってねえ！？」

むう、この上なく分かりやすい簡潔な説明かと思ったんだが。

「だから、『俺服濡れてる↓気持ち悪い↓早く着替えたい↓俺先に行く』ってことだ。分かったか？」

「状況説明どうも！！でも、肝心の理由が謎のままだ！！」

そのくらい察しろよなー、まったく。

「いいか？俺たちは、今この娘に覗きの疑いをかけられている。ここまでは分かるな？」

「ああ」

「そこで、ちゃんとした説明がこの娘に必要。OK？」

ハヤウエイが頷く。

「だが、俺は服が濡れてて気持ち悪いから早く着替えたい。そこで、

おまえにここを任せて、俺は先に行って服を着替える。どうだ、分かったか？」

「なるほどな……って、お前が先に行く必要ねえだろ!？」

「?」

「何!?! その“本当に意味が分かりませんが”みたいな顔は!! 着替えくらいその辺でやれよ!!」

「:ちっ」

「舌打ちすんな!! どんだけ先に行きたかったんだよ!？」

「お前を生贄にしておいて行きたいくらい」

「生贄!?! 今、生贄って言ったよな!?!」

まったくもって煩い奴だな、こいつは。

「分かった分かった。ちょっとその辺で着替えるから待ってろ」

そして、俺は渋々その辺の草むらに入って行った。

SIDE ハヤウエイ

レイが服を着替えて、すんごい顰めっ面しながら戻って来た。1
人だけ逃げようたって、そうはいかねーからな。

「茶番は終わったか？」

「ああ、待たせたようですまない」

律儀に待っててくれたみたいだし、一応謝っておいた。

「それでは話を戻すが、まずはそなたら2人が覗きをしておったかは今は置いておくとして、わらわは危ないところを助けられた。一応礼を言っておくことにする」

「は、はあ……」

え？今のが礼なのか？

「まあ、今のが礼だって言うんならありがたく受けておこう」

「だが、それはそれとしてだ」

またレイピアを抜いて俺たち、というか俺の方に突き付けてきた。

「もし、次に覗きをするようなことがあれば、ただでは済まさぬぞ」

「だから、覗きなんてやってないってば！！」

この娘、まだ俺たちが覗きをしたって言うのかよ。

「分かった分かった、よく肝に銘じとくさ」

「レイ!？」

「だってさ、何言っただって信じちゃくれねーよ、この娘。だったら、もうこっちが折れるしかなくね？」

ぐっ、それは確かにそうだが。

「それって、覗きをしてたって認めるってことになるのか？」

「そうなるな」

そんな、無茶苦茶だろ!？

「それにさ、覗きはしてないけど裸ガン見したじゃん」

「ぐっ」

うう、心なしか女の娘からの視線がより冷たく、キツイものになった気がする。

「素直に認めとけ、その方がお前の身の為だと思うぞ？」

「……分かった」

「…ふん」

俺の言葉を確認すると、レイピアをまた鞆に収め、踵を返して去って行った。

「……ハヤウエイ」

「……何だ？」

「……疲れたな」

「……ああ」

「……行くか」

「……ああ」

「……おっばい、大きかったな」

「……ああ……って何言わせるんだよ!？」

S
I
D
E

O
U
T

俺、参上!! (後書き)

お読みいただきありがとうございました。次回、やっと学校に辿り着きます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3696t/>

第2の人生頑張ります。

2011年10月8日05時46分発行